

人生という旅の夢

晴れた日に電車に乗る。シルバーの車体に赤いラインが鮮やかな東横線だ。向かう先は、横浜である。私の大好きな、港のある街。レトロでモダンな。

海が見たくなったら、出かけていく。ちよつとした遠足気分なのだけれど、横浜まではあつという間だ。特急に乗れば渋谷から三十分くらい？ みなどみらい線が開通してからは、乗り換えなしで馬車道や元町、中華街へも行くことができるとなった。なんて便利なんだろう。さあ、どの駅で降りようか。横浜には美味しいものがたくさんある。どこで、なにを食べようか。馬車道のカフェでアイスクリームを？ みなどみらいのランドマークタワーでイタリアンを？ 元町の古い洋館のティールームでシフォ

ンケーキを？ いや、それとも、やはり中華街でお腹いっぱい飲茶を？ そんなふうに迷うことも楽しくてならない。

平日の昼過ぎならば、電車はさほど混んではない。座席にゆつたり腰かけて、ふとあたりを見回すと、ちっちゃな子どもを連れた若いお母さん、熱心に文庫本を読んでいる女の子、こつくり居眠りをしてるビジネスマン、洒落た眼鏡をかけた白髪の品のいいおばあちゃん……さまざまな人々がいる。それぞれの人生を乗せて、電車は走っているんだなあ。ほんの束の間とはいえ同じ電車に乗り合わせたのも、なにかの縁だろうか。そう思うと、この瞬間が愛しい。大きな窓の外では目まぐるしく風景が移り変わっていく。耳をすませば、ぴゅううう、と風の



イラスト・岡林玲生

鳴る音。がたがた、ごつとん、がたん、ごん、私たちは前へ前へと進んでいく。ときおり、ちん、という軽やかな音。耳の奥がくすぐつたくなる。

いよいよ横浜が近づくと、なんだか、もうじつと坐ってはいられなくて、いちばん前の車両の、乗務員室の傍らに立つ。ここは実はひそかな人気スポット。座席が空いていても、わざわざ、この場所に陣取って立っている人が必ずいる。運転席の窓から臨む風景を見ることができからだ。あの眺めは、すこぶる魅力的だと思ふ。なだらかなラインを描いて、ずつと先まで鉄のレールが伸びている。「線路は続くよ、どこまでも」——なつかしい歌、そのままに。もちろん、ここは都会だから、「野をこえ、山こえ、

谷こえて」というわけにはいかないが、「はるかな町まで ぼくたちの たのしい旅の夢 つないでる」

わくわくする胸のうちに、この歌詞はしつくりと馴染む。どうしてだろう、線路を見ていると、なにやら懐かしい。郷愁のようなものを覚える。子どもの頃、ちいさな手に小銭を握って跨線橋からレールを見下ろし、どこか遠くへ行ってしまういたい、と考えたことを思い出さうだろうか。

いつのまにか、大人になった。でも、運転席の窓からの眺めは、私を未来へと、そして、同時に過去へと連れていく。線路はたしかに、人生という旅の夢をつないでいるのだ、と実感する時間である。

文・野中 柊
Hiiragi NONAKA

新潟県生まれ。立教大学卒業後、ニューヨーク州在住中に「ヨモギ・アイス」で海燕文学新人賞を受賞してデビュー。小説に『きみの歌が聞きたい』『マルシェ・アンジュール』『恋人たち』『恋と恋のあいだ』、エッセイ集に『きらめくジャンクフード』、童話に「パンダのボンボン」シリーズなど著書多数。日常のさりげない出来事、美味しそうな食の描写に人気がある。

撮影・恩田亮一